「わたしはまことのぶどうの木」

2025 年 5 月 21 日（水）

聖書研究祈祷会　奨励:赤井博夫

聖書箇所：ヨハネの福音書１５章 1～10

讃美歌：新聖歌　429 番　『地の塵に等しかり』

今日のヨハネの福音書１５章１節には、
『わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です』とあります。
この『まこと』はギリシャ語で『アレーシノス』、純粋のという意味です。
詩篇 80：8 には『あなたはぶどうの木をエジプトから携えだし』とあります。聖書にはあちこちにぶどうの木や実が出てきます。ぶどうの木は紀元前何千年も前からあったようで、原産地は中近東と言われています。古代ヨーロッパや中国に運ばれ、中国から日本に入ってきたとされています。

この教会周辺もぶどうの産地です。私の住んでいる太子町もぶどうの産地です。
私は家から教会までグリーンロードと呼ばれている、いわゆる農道を通つて来ていますが、途中の羽曳野市・駒ヶ谷もぶどうの産地です。ぶどう畑とぶどう畑の間を縫って来ています。朝な夕なにぶどう畑を見て生活をしているわけです。間もなく収穫が始まります。最初はデラウェアから、巨峰、ベリーエー、シャインマスカットと 10 月頃まで収穫が続きます。収穫が終わると農家の方は少し休まれるのかと思いきや、11 月後半 12 月頃から、来年に向けて、ハウスのビニールを張り替えたり、ぶどう畑の中で動きが出始めます。それが 2 節の「枝の刈込」です。ぶどうは蔦科の果実で、放って置くとすぐにジャングルになります。
農家の方が言われていましたが、弱い芽・弱い枝、強い芽・強い枝がありますが、強い芽・強い枝を思い切りバサバサと刈込、弱い芽・弱い枝を残すとのことでした。なぜなら弱い芽・枝ほど必死に幹にしがみついて養分を吸い上げるので、良い実につながるということでした。乳飲み子が母親の胸にしがみつくようなものです。大風に吹き飛ばされそうな弱い枝をあえて残すということです。まさに私のことではないかと思わされました。

16 節をご覧下さい。まさに弱い枝を選んで残して下さったのです。
大切なことは 4 節です。「とどまりなさい」と 3 回言われています。「とどまる」ということは、「ある範囲を出ない」「究極のものとする」ということです。
5 節、6 節、7 節、9 節、10 節と「とどまりなさい」が繰り返されています。
何にとどまるのか、具体的に 7 節に「ことば」に、9 節に「愛に」10 節では「戒めを守るなら」とあります。

今日読んだ先の 12 節には、「互いに愛し合うこと」これが戒めですとあります。
ここでイエス様がこの 15 章の 1 節に「わたしはまことのぶどうの木」に戻ります。
「まこと」はギリシャ語で純粋という意味でした。
　イスラエルはぶどうの木にたとえられています。
　エレミヤ書 2 章 21 節では『わたしはあなたをすぐれたぶどうの木として植えた』とあります。まさにぶどうの木はユダヤ民族の象徴・シンボルでありました。しかし、ユダヤ民族には、いつしか、私たちは神に選ばれた者、すなわち『選民思想』で排他主義に陥り、イスラエル民族に属しているから、「神のまことのぶどうの木」と考えるようになりました。
　そこでイエス様は弟子たちに『わたしこそまことのぶどうの木』だと言われているのです。血筋や出生や国柄のゆえに、神のぶどうの木の枝とは言えない。そのようなものを越えて『互いに愛し合いなさい』と弟子たちに言われたのです。わたしにつながって、とどまること、わたしを信ずる信仰こそ救いに至る道だと言われているのです。

　ガラテヤ人への手紙 5 章２２節には『御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。』とあります。
　私は高校 2 年生の夏休みに、母の知り合いのぶどう畑でアルバイトをしたことがあります。朝早く５時か６時くらいに農家の方がぶどうを取ってかごに入れられています。私は午前８時頃に行って、作業台の上にかごに入ったぶどうを一房ずつ出して、まだ青い実とか黒い実、鳥に突っつかれたような実を、ハサミで切って、出荷用の箱に入れて、午後から近くの集荷場に持ち込んで、そこから市場に運ばれて行くアルバイトでした。

　もう一度私たちの実が、『互いに愛し合いなさい』とイエス様が言われる『愛』だろうか、『喜び』が、神様の喜びに満たされているだろうか、『平和』、戦争の止まない時代の中で、ビリーグラハムの書かれた「神との平和」が私たちの中に保たれているだろうか、ともう一度吟味して、このところから遣わされて行きたいと思います。
　『わたしはまことのぶどうの木』この木にしっかり、つながって、とどまって、成長させていただき、良き実を成らせていただきましょう。